

## No.105 会社訪問

## 板橋理化工業株式会社

代表取締役 設楽 正弘 氏



会社プロフィール

代表者：代表取締役 設楽正弘

所在地：〒174-0065 東京都板橋区若木1-2-18

TEL：03-3933-6181 FAX：03-3933-6185

創立：昭和23年（1948年）6月7日

資本金：1,800万円

営業所：名古屋営業所

事業内容：腐食試験機・環境試験機などの製造と販売

URL：http://www.itabashi-rika.co.jp

聞き手：野村篤史（広報委員）菅 武彦（専務局）取材・撮影・編集：クリエイティブ・レイ(株)

いち早く“塩水腐食試験機”を開発し  
環境試験の分野を切り開いてきた専門メーカー

— まずは、御社の主な事業内容をお教えいただけますでしょうか。

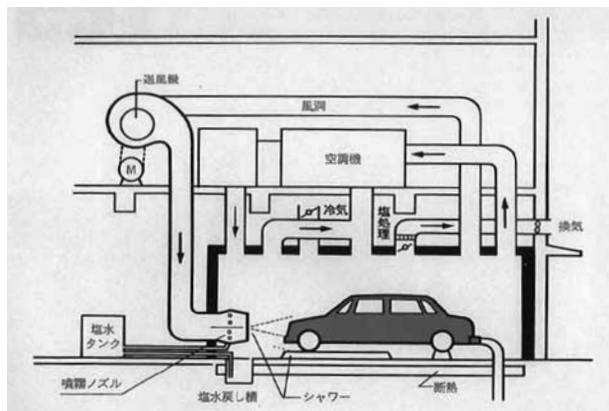
弊社の事業は環境試験機の製造と販売で、その中でも主力製品となるのが「腐食環境試験機」です。

弊社の腐食環境試験機は塩水噴霧（CASS）熱風乾燥、湿潤、冷却、外気温などの試験条件を任意のサイクルで組み合わせて試験を行うことが可能です。自動車部品、塗料などの腐食試験などに幅広く使用されています。試験機の製造は、標準品をはじめとしてお客さまと相談しながら、お客さまのニーズに合わせ、製品を作り上げることを特徴としています。

— 御社は大手自動車メーカーとの付き合いが長いとお聞きしていますが、共にどのような試験機を作られてきたのでしょうか。

弊社が自動車メーカーのT社と共同で開発した試験機として、「車両塩害環境腐食試験機」があります。この試験機は、日本の自動車メーカーが競うように車を輸出していた昭和50年代に開発されました。北米、

カナダなどでは、冬になると路面の凍結や雪の対策のために道路に塩をまきます。しかし、当時の日本車はその対策を十分にしていなかったため、塩害によって、車が錆びたり、電気系統の不具合が生じたりして、大きな問題となっていました。「車両塩害環境腐食試験機」は、その対策として、アメリカ北部やカナダの走行環境を作り出す試験機として開発されました。その試験機の中に車を入れて塩害腐食試験を実施したところ、短い期間で十分な評価を得ることができました。



車両塩害環境腐食試験機 概要



塩水噴霧試験機



複合腐食試験機

— 御社の創業は昭和23年(1948年)とのことですが、創業当時の様子などをお聞かせいただけますか。

板橋理化学工業を創業したのは、私の父である設楽正太郎です。戦後まもない頃、父は町工場がたくさんあったここ、東京・板橋で鉄・アルミ・真鍮といった金属を仕入れては、鍋や釜などの生活必需品を作っていました。創業当初は、理化学機器や医療機器を製造していましたが、お客さまからの依頼があり、その後、環境試験機分野へ移行していきました。

1950年に朝鮮動乱(昭和25年～)が勃発しましたが、聞いた話では、戦地で使われていた米軍の自動車や戦車のオーバーホールは日本で行われていたそうです。その際、米軍からオーバーホールに使う部品等の腐食試験を行うよう指示があり、次第に腐食試験機のニーズが高まっていきました。

当時の腐食試験の塩水濃度は20%の塩水を噴霧する「塩水噴霧試験」です。「塩水噴霧試験」とは単に塩水を直接噴射するのではなく、壁などに反射させて噴霧し、大気暴露腐食に近い条件で加速腐食させることを意図した試験法のため、かなり高いスペックが要求されていました。塩水濃度20%という環境下で行われるため、腐食試験では結晶化した塩で噴霧口のノズルが詰まってしまう問題が生じていました。そこで先代の社長は、東京大学の久松敬弘先生と共同でジェット式噴霧ノズルを開発し、それを装備した「塩水噴霧試験機」を作り上げました。

以後、弊社ではその「塩水噴霧試験機」をはじめ、

「総合試験機」、「複合サイクル試験機」など、さまざまな環境試験機を作り出してきました。

— 当時の腐食試験機はアメリカ軍が求める基準で作られていたのですか。

戦後、アメリカ軍の管理の下において、こういうスペックで試験機を作りなさいという要求があったのだと思います。アメリカ軍から腐食試験機などの、さまざまな資料を提供してもらいながら、当時の日本の技術者たちは見よう見まねで腐食試験機を完成させたようです。

今日の我が国の科学技術の礎は、アメリカ軍からの技術指導や支援によるところが大きかったのではないのでしょうか。

— 創業者の設楽正太郎氏は、御社を創業する前はどのようなことをされていたのでしょうか。

戦時中、東京から約500名ほどが軍属技術指導員として動員されました。父はその中の1人として、広島にあった呉海軍工廠に配属になったそうです。父の最初の仕事は戦艦大和を建造することでした。そのほかにも、潜水艦(イ号・ロ号)などの建造や修理に携わっていたと教えてくれました。

戦後、身につけた技術を活かすため、東京・板橋に戻り、やがて、理化学機器の道に進みました。

こうした波乱万丈の道のりを経て、昭和23年(1948年)6月に創業し、現在の板橋理化学工業に至ります。

## 経営資料

— 創業者に代わり、会社を継いだ設楽社長にとって、これまでに強く印象に残ったお仕事、あるいは出来事があれば、お聞かせいただけますか。

私が専務として、名古屋地区を担当していた昭和48年(1973年)頃、自動車メーカーT社の担当者から「クライアントと製作メーカーは一心同体で、互いに協力し合って良いものを作り上げていきたい」という言葉をかけていただきました。やはり、固い信頼関係があってこそ、良いものを作ることができるのだと思いますし、急な要望にもすぐに駆けつけてくれる会社はクライアントにとっても、頼もしい存在です。私自身も仕入れ先とはそういう関係を築きたいと思い、この姿勢を大切にしてきました。

かつて、コストダウンをしようと、海外の企業と取り引きをしようと考えたことがあります。すると、先方からは「安く作ることはできますが、そうすると、品質は落ちますよ」とはっきり言われてしまいました。我々が考えるコストダウンとは、品質を保持しながら、コストを下げることだったため、その企業とは考え方が違うと思い、取り引きすることをやめました。

— 中小企業で大手自動車メーカーと直接、取り引きできる会社はそう多くないと思いますが、お付き合いはいつ頃から始まったのでしょうか。

昭和26年頃からと聞いていますが、T社と直接、仕事をしている弊社のような中小企業は、全国でも数社ではないでしょうか。

私自身も以前、T社のグループを担当したことがあります。当時「三河武士」と言われたグループを内部から見ることができ、本当に貴重な経験をさせていただきました。

— 印象深い仕事や出来事とは逆に、経営上、困難だった出来事などをお話いただけますか。

まだ若い頃のことですが、よい話に乗ったことがありました。結果として、我々の実力以上のムリをすることになってしまい、それまでお付き合いのあったお客さまに大変なご迷惑をかけてしまったことがあります。

そこから得た教訓としては、我々、製造メーカーは

急成長してはいけない、会社の実力以上の仕事をしてはいけないということです。

— 御社の経営方針や経営理念をお聞かせいただけますか。

我々はあくまでも製造メーカーです。モノづくりの基本を忘れず、これまでの経験を大切に、前へ進んでいくことを理念としています。

もう少し具体的に言うと、弊社の心臓部となっているのは、先代の社長が基礎を作ってくれた噴霧ノズルです。それを基盤として私がアレンジすることで、さまざまな腐食試験機を作ってきました。このノズルを生み出した技術があったからこそ、事業を続けることができたとも言えます。この技術を大切にしながら、アレンジを加え、最先端技術の開発に挑み続けることが大切だと考えています。

— 経営理念とは別に、座右の銘や心がけている Motto などがあれば、教えてください。

私の Motto は「壁に突き当たったときは、基本に戻る勇気を持って」、「チャンスは必ず来る、それを逃すな」、「物事を成すときは、3の手まで考える」の3つです。

— 日頃から設楽社長が社員の方々に伝えていることはございますか。

経営理念や Motto についての質問でお話ししたようなことを社員にも伝えていきます。

たとえば、自分で設計した装置については、打ち合わせをしっかりと行い、組立作業員達の意見に耳を傾けるとともに、自らも率先して作業にあたることで、社内のチームワークを強くするうえで大切だと説いています。それ以外にも、装置への探究心、技術向上に取り組む姿勢も、ものづくりをするうえで大事だと伝えたりしています。

製品とは、ただ製作するだけでなく、なぜ、それが必要とされているのか、そして製品を使用するお客さまに対して、どのように貢献ができているのかを知ることも大切だと社員に伝えていきます。

新入社員には、まず「試験機に張り付きなさい!」と教えています。試験機の横に張り付くように立っていると、温度変化などもわかってきますし、試験機の性格のようなものもわかってくるのです。

そのほかには「パソコンの画面を見るよりも現場を見なさい!」、「メールではなく、ファックスを使いなさい!」とも言っています。現場にはパソコンの画面では見えないものがありますし、ファックスは字の書き方で送り手の感情や熱意が伝わります。メールでは、それらは十分に伝えきれないと私は考えます。

— 愛読書や敬愛する人物などをお聞かせいただけますか。

敬愛する歴史上の人物は、戦国時代の名軍師として知られる黒田官兵衛です。自分が前に出るというよりもリーダーを補佐し、成功に導く役割の方が好きということもあり、常に先の先を読み、戦略を立てて、リーダーに的確なアドバイスをする、軍師に惹かれます。

— 趣味や好きなスポーツなどについて、お聞かせいただけますか。

父が骨董の収集が好きだったこともあり、私も骨董品に興味をもつようになりました。特に古銭に関しては、いろいろなものを鑑賞したり、専門書を読んだりして研究をしています。

そのほか、日本各地の物産を見るのも好きです。デパートなどで物産展が開催されると足を運ぶようにしています。その地方ならではの物産に触れることは非常に楽しいです。

— 設楽社長は社長業のほか、保護司もされているとのことですが、保護司という仕事を通してお感じになることはございますか。

保護司の仕事をお引き受けする際は、かなり悩みました。人生の再スタートに立ち会う保護司という仕事を通じて、いろいろな経験をさせていただきましたし、その経験が私自身の勉強にもなっています。

たとえば、注意やアドバイスをするときの言葉の選び方や、人を導く難しさなどいろいろと考えさせられ

ることがあります。

— 最後に、当協会に対しご意見やご要望などがありましたら、お聞かせください。

協会から発信されるいろいろな情報は有効に活用させていただいています。弊社は日本試験機工業会の会員にもなっているのですが、中国が恒温槽の新たな規格を作ろうと準備しているという話は、科学機器協会からの情報で知りました。現在、その対策について話し合いを持とうとしているところです。

今後もこのような役立つ情報をいち早く発信していただき、情報の共有が図れればと考えています。



高温での腐食試験ができる装置の実現で、試験時間を大きく短縮させた新製品「超加速促進腐食試験機 (SACT)」の功績が認められ、板橋産業連合会より表彰された (2014年)